
マリオネット

霜月 あかり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マリオネット

【NNコード】

N8013M

【作者名】

霜月 あかり

【あらすじ】

空っぽな人形・・・その子に手を差し出してくれたものは・・・。

暗い湿った所。周りはガラクタなどで散らかっている所。ネズミや虫が這い出でぐる所。そこは「コモだらけ。私はそこで固いコンクリの地面に寝転がっている。人は皆嫌がつてこんな所にはこないけれど、私には何も感じない。わからない。全てをありのままに受け止める。

私には「心」がない。空っぽだ・・・。

着ている服は埃まみれでボロボロだ。髪もグシャグシャでこんがらがっている。ここに居る理由は分かっている。

最初の私は箱に入れられていた。服もピンク色のフリルをふんだんに使つた可愛らしい。髪も金髪で丁寧に整えてありリボンが飾られた。箱の中は綿で心地よい。箱は丁寧に包装されていてどこかに運ばれていく。

運ばれたところは豪華なお屋敷。その娘のお誕生日だった。私はその娘の父からのプレゼント。女の子は嬉しそうに丁寧にはこの包装を取り、ふたを開ける。そして私を見るなりにすぐ手にとつて喜んでくれた。そしてお父さんに「ありがとう!」とお礼をいつて私を眺める。

女の子は私をとても大事にしてくれた。服を着せ替えてみたり、髪型を変えてみたり、一緒にベッドで寝たり。お出かけのときもいつも一緒だった。とても楽しい日々だった。空っぽの今と違ひいろんなものに満ち溢れた。

けれど、そんな楽しい日々もすぐに終わつた・・・。

女の子はある時に私とは違うモノに心を奪われてしまつた。そし

て私を置いてそのモノの方へと行ってしまった。私は置いてきぼり。服や髪などがドンドンと汚く、乱れていき埃まみれのガラクタへと変わつていつた。

そして気づいたらここにいる。もうどのくらいの時がたつたのだろう。もつ忘れるほどのがたつた。あの娘と過ごした日々の記憶が崩れ落ちていく。いつになつたら終わりが来るのだろう。はやく・・・はうく終わりにさせて。

すると不意に私は持ち上げられていた。気づいて見てみるとそれはとても優しそうなおじいさん。最初はその辺にうろついているホームレスという人間だと思った。ホームレスやゴミ漁りは私をたまに手に取ると食べ物ではないとがつかりしハッ当たりするように私を投げ捨てる。その時、硬いコンクリートの地面に叩きつけられるなだが私は空っぽ。なにも痛みなんて感じない。ただ、服が汚れていくだけ。このおじいさんもきっと私を捨てるのだろう。そして終わりをまた待つのだろうと考へた。

しかし、考へなんてものは大ハズレ。私は軟らかいものに包まれたかと思つとどこかにしまわれる。何がおきたのか分からなかつた。しばらく待つて思い立つたのは終わりが迎えに来たのこと。きっとあのおじいさんはゴミなどを処分する人なのだ。これでやつと私も解放される。やつと何も考へず終われるのだ。そしてガタゴトとゆれながら私は運ばれる。終わりに向かつて。

けれどまたもや大ハズレ。ついたところは暖かくて優しい所。袋から出された瞬間、光がまぶしかつた。私でも感じられた。一体このおじいさんは何をするつもりなのだろう。するとおじいさんはちよつと失礼などと言つて私に目隠しをした。目の前が真っ暗になる。もう考へることができない。まわりで物音がする。私の身体がいじられていいく。なにかに変わつていく。気が遠くなつていく・・・。

どれくらいの時がたつたのだろう。私はまだ田隠しをされている。力チャカチャと周りの音が途絶えない。でも感覚といつものだろうか？なにか不思議な感じがする。なんだろう。ふと疑問を持つたとき。

「よし、できたぞ。」

おじやんの声が聞こえて、周りの物音も途絶える。なにが出来上がったというのだろう。そしたら田隠しがはずされた。

光が差し込んでまぶしい。目を閉じられずにいると身体がういた。おじいさんかと思うと、おじいさんは全く私に触っていない。勝手に動くことができないはずの身体が立つ。何が起きたか分からぬ。しかしながら感覚が私の身体を動かしだす。くるくる回つて踊るよう。よく見ると私の服も変わつていた。あのボロボロだったはずの服がピンクを基調としリボンとフリルをふんだんに使つた可愛らしいドレスに変わつていた。それはくるくる回るとフワリとなびき私を飾りつける。

「あはは。可愛いいらしいう姫様の誕生だ。」

気づくとおじいさんは嬉しそうに笑つて手を動かしている。一体何をいじつてているのだろう。辺りを見渡すと私の体の節々に透明な細い糸が巻かれて上に続いているのがわかる。どうやらおじいさんはこの糸をうごかして私を動かしているようだ。どこかで見たことがある光景。たしか私のようなものは・・・。

—マリオネット

その響きがおじいさんの口から聞こえた。そうか、私はただの人形ではなくマリオネットになつたのか。おじいさんは人形師なんだ。私はくるくると回りながら考える。私でさえまだ輝いていけるんだと。それがとても嬉しかつた。これから私はこのおじいさんの手で踊り輝いていくのだ。

。 そのとき空っぽな私を暖かくて優しいものが満たしてくれた・・・
।

(後書き)

初めての投稿です。分かると思いますが「マリオネット」は「操り人形」です。

この小説はふと「ゴミ捨て場に捨てられていた大きな人形」みて書き出してみました。あまり知識がないため人形から操り人形になれるものかわからなかつたのですが、人形が幸せになるにはどうなるか考えて造つた道です。これを読んでなにを感じるのかそれは個人の自由です。

ぜひ、ご感想をお聞かせください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8013m/>

マリオネット

2010年11月13日23時19分発行